

# 下呂石原産地湯ヶ峰の近隣における石器生産の一様相 ～下呂市三ツ石遺跡採集資料より～

長屋幸二

An aspect of product system of the Gero-ishi flakes near by Yugamine  
:Origin place of the Gero-ishi  
～From the stone artifacts collected at Mitsuishi-site in Gero-city～

Koji NAGAYA

## 1. はじめに

今回紹介する資料は、1982(昭和57) 年、1983(昭和58) 年に寄贈を受けた下呂市三ツ石遺跡で採集された資料(登録番号A-318、A-320) と、1982～85年にかけて当時の当館考古担当学芸員が同遺跡において採集した資料である(登録番号A-345、A-386、A-392)。

三ツ石遺跡は、下呂石原産地の湯ヶ峰へ直線距離で

2.3km、下呂石転石が採取できる乗政川へ500m足らずと石材獲得が容易なところにある。原産地にほど近い遺跡における石器生産の様相を明らかにすることは、石器石材の消費・流通を考える上で欠かせないことである。したがって、特に剥片生産・石材消費のあり方をテーマに据えて、当資料群を紹介していきたい。



第1図 湯ヶ峰周辺の縄文時代遺跡 改訂版岐阜県遺跡地図より Scale 1/50,000

2. 三ツ石遺跡

三ツ石遺跡（岐阜県遺跡番号G23 G01069）は、下呂市乗政三ツ石に所在する。飛騨川支流乗政川左岸の山中に広がる南北500m、東西800mほどの緩斜面の南西部に位置する。標高約600m、乗政川との比高差は約100mである。

この緩斜面は、湯ヶ峰断層により山の南西部（すなわち谷側）が隆起し、それにせき止められた崖錐堆積物によって形成されたものである。湯ヶ峰界限には、断層とかわる同様の緩斜面がいくつも見られる。乗政川右岸の長洞谷下流、湯ヶ峰の南に位置する初矢、西麓の大林、大洞などに見られる緩斜面がそうである（岩田,2000）。こうした山中に開けた高原状の平地は、後期旧石器時代や縄文時代に人類の活動の場として好まれたようで、多くの遺跡が知られている（第1図）。

三ツ石遺跡は『改訂版岐阜県遺跡地図』（岐阜県教育委員会,1990）には縄文時代の遺跡として登録されている。下呂町史『飛騨下呂』通史・民俗編には縄文時代遺物の散布地として、石斧・石皿・石鏃・石棒・石錘が出土していると報告されている（下呂町,1990）。

館蔵資料には100点余りの縄文土器片と300点余りの石器類がある。縄文土器片のほとんどは年代を特定することが難しい無文や縄文を地文とする小片であるが、北陸系・信州系の中期後葉に属する土器片や北白川上層あたりに属する後期前葉の土器片が少なからず認められ、大まかな時期をつかむことができる。また、胎土に繊維を混入する早期後葉の土器片も数点ある。断続的に利用されたところであるようだ。

当資料群の石器組成は表1のようになっている。石器の器種認定については、石鏃・石匙・石皿・磨石叩石類・石製土掘具・石錘・磨製石斧については寄贈を受けた時点で分類されていたが、それ以外のものについては一括して収納されていたものを筆者が分類した。

石器の器種組成については、地表面採集資料であることから採集者による選択が働くことが想定される。したがって、ここにあげた数値が遺跡に残された石器器種・石材の割合をそのまま反映しているとは限らない。しかし、当資料群を見る限り、石鏃をのぞけば剥片類が多く（それでも、湯ヶ峰近隣遺跡における近年の発掘成果と比べるとかなり控えめな数値であるが）、しかも後述するように剥片には小片が多い。小さな剥片類までしっかりカバーして採集していることから、収集傾向の偏りはそれほど顕著でないといえよう。（石鏃の割合がやや高いが、乗政川左岸にある下島遺跡の発掘調査でも他の石器を圧倒する数の石鏃が見つかった。当資料群にお

いて石鏃の数が多いことも、収集傾向の偏りに起因するものではないのかもしれない。）また、筆者が分類した器種については採集者による選り分けはさほど働いていないと考えられる。

さて、当資料群の石器組成の特徴として、まず石器器種の多様さがあげられよう。これは、当該期の遺跡のあり方としては特別なものではない。しかし、そのことこそ、当遺跡のあり方を見誤らないよう注意しておくべき重要な事柄である。すなわち、当遺跡は石器製作に特化した原産地遺跡ではなく、原産地近くにある生活遺跡に過ぎないと言うことである。今のところ、湯ヶ峰近隣の遺跡で、原産地遺跡と呼べるものはポイント製作遺跡である大林遺跡のみであり、他は全て生活遺跡として捉えられる。

次に、当資料群の特徴として、石錐を欠くことがあげられる。有調整剥片の中に石錐の未成品と思われるもの

表1 石器組織

| 石器種別    | 点 数 | 石材（下=下呂石、Ob=黒曜岩、Ch=チャート岩） |
|---------|-----|---------------------------|
| 石核      | 21  | 下21点                      |
| 剥片      | 194 | 下173点、Ob15点、Ch6点          |
| 石鏃      | 71  | 下68点、Ob1点、Ch2点            |
| スクレイパー  | 18  | 下18点                      |
| 石匙      | 1   | 下1点                       |
| くさび形石器  | 9   | 下8点、Ch1点（スポール）            |
| ポイント未製品 | 3   | 下3点                       |
| 石鏃未製品   | 4   | 下4点                       |
| 有調整剥片*  | 3   | 下3点                       |
| 石皿      | 1   |                           |
| 磨石・叩石類  | 6   |                           |
| 石製土掘具   | 6   |                           |
| 石錘      | 3   |                           |
| 磨製石斧    | 1   |                           |
| 合計      | 341 |                           |

（有調整剥片\*：刃部作成を意図しない剥離が施された剥片を有調整剥片とした。いわゆるRF(Retouched Flake)である。何かの未成品か石核である可能性、石器製作の練習もしくはアクシデントによる剥離の可能性もある。打面調整剥片など調整の際に生じた剥片と区別するために有調整剥片とした。ちなみに、刃部作製を意図したと思われる剥離が施されたものは、調整剥離の大小、粗密、多寡にかかわらずスクレイパーとした）。

が1点あるのみである。下島遺跡では、石鏃1,011点、くさび形石器172点、石錐120点、スクレイパー111点などが報告されており（高井,1985）、石錐は石鏃、くさび形石器に次いで多い石器となっている。下島遺跡も縄文時代後期が主であり、当遺跡の時期と重なっている。下呂石製の石錐については、形態・製作技術・分布など明らかにすべき課題が多くある。別に検討する必要がある。

それから、草創期に遡るポイント未成品が3点みられることも紹介しておきたい。質量68g・39g・35gとやや小さめで、形も整っていないが、薄く深く施された調整剥離に表裏両面とも覆われている。スクレイパーエッジの作出とは異なり器厚を減じさせるための調整であり、ポイント未成品と判断した。一方、ポイントチップと考えられる剥片は2点ほど認められるに過ぎず、当資料群を見る限り、当遺跡でのポイント製作は盛んではなかったようである。また、4点の石刃が認められるが、質量5g～14gと大林遺跡の石刃と比べて小型である。石刃石核は見られないことから搬入品であろう。ポイントに伴うものと見られるが、後期旧石器時代にまで遡る可能性もある（長屋,2005）。

3. 下呂石製石核資料について

では、当資料群に見られる剥片生産・石材消費の様相について概観したい。

まず、当資料群の石核について見ていきたい。表2は、石核を質量の小さいものから順に並べた一覧である。

素材の状態の項目では、石核が剥片素材か礫素材、もしくは分割礫かを示した。ポジティブ面（以下ポジ面と称する）が残るものを剥片素材、大きなネガティブ面（以下ネガ面と称する）や平坦な分割面が残るものを分割礫とした。不明とあるのは、剥離が進んでいるため素材の状況が分からないものである。第2図に示したように、4は作業面左端にポジ面が見え、5は打面がポジ面であることから剥片素材であることがわかる。16は打面が大きなネガ面であり、分割礫素材とした。

礫面有無は、礫面を残すものに○をつけた。露頭で得られる下呂石は、滑らかな節理面で露頭から剥落したものが多く、一部に流状構造があらた状になって表れている。遺跡で得られる下呂石の礫面には、露頭における状態と類似したものがあり、これらは露頭採取のものと考えられる。当資料群に見られる石核は、礫面の観察から多くが露頭で採取されたと考えられる。4・16は滑らかな節理面を有し、21には節理面と流状構造が見られる。

露頭から剥落した下呂石は、斜面を転がる間に多くが

割れ、フレッシュな黒い面を見せる。それが川に落ち、流されるうちに、滑らかな節理面もフレッシュな断面も一様に水磨を受ける。遺跡で得られる下呂石礫面には、水磨による衝撃痕が風化し、爪状のクラックとなって表れるものがある。21点の石核中、爪状クラックが観察されたものは3点のみであった。14は滑らかな節理面が残るが、稜部に爪状クラックが発達する。5は礫面全面が爪状クラックに覆われている。

作業タイプは、剥片を生産する際に打面や作業面をどのように設定し、石核を消費していくかによって分類したものである。打面を1面に固定し、作業面を1面ないし2面（ほとんどは1面）設定するものを「打面固定タイプ」とした。打面を固定しないで転位するものを「打面転位タイプ」。打面と作業面を入れ替えながら剥離していくものを交互タイプとした。

表2 石核一覧表

|    | 素材の<br>状態 | 礫面<br>有無 | 作 業<br>タイプ | 質量<br>(g) | 図<br>面 | 備 考         |
|----|-----------|----------|------------|-----------|--------|-------------|
| 1  | 剥片        |          | 交互         | 22        |        |             |
| 2  | 剥片        |          | 交互         | 27        |        |             |
| 3  | 剥片        | ○        | 打面固定       | 28        |        |             |
| 4  | 剥片        | ○        | 打面転位       | 29        | ○      | 礫面打面        |
| 5  | 剥片        | ○        | 打面固定       | 30        | ○      | 爪状クラック      |
| 6  | 不明        | ○        | 打面転位       | 31        |        |             |
| 7  | 剥片        | ○        | 交互         | 36        |        |             |
| 8  | 剥片        | ○        | 打面転位       | 38        |        |             |
| 9  | 不明        |          | 打面転位       | 38        |        |             |
| 10 | 礫         | ○        |            | 39        |        | 礫           |
| 11 | 剥片        | ○        | 交互         | 40        |        |             |
| 12 | 礫         | ○        | 打面転位       | 46        |        | 礫面打面        |
| 13 | 不明        | ○        | 交互         | 62        |        |             |
| 14 | 礫         | ○        | 打面固定       | 74        | ○      | 礫面打面・爪状クラック |
| 15 | 不明        |          | 打面転位       | 80        |        |             |
| 16 | 分割礫       | ○        | 打面固定       | 88        | ○      | 打面が大きなネガ面   |
| 17 | 礫         | ○        | 打面固定       | 112       |        | 亜角礫・爪状クラック  |
| 18 | 不 明       |          | 打面転位       | 130       | ○      |             |
| 19 | 分割礫       | ○        | 交互         | 146       |        |             |
| 20 | 礫         | ○        | 打面固定       | 247       |        | 礫面打面        |
| 21 | 礫         | ○        | 交互         | 308       | ○      |             |

質量の平均は78.6gであるが、この数値より小さな資料は14点であるのに対して大きな資料は7点と、平均の値としては偏っている。数点の大きな石核がノイズとな

っている感がある。

むしろ、質量40gあたりを境界線にして、小型の一群(1~9・11)と大型の一群(12~21)に分けてとらえた方が良いでしょう(10については後述する)。小型の一群は、30g台後半をピークとする正規曲線に近い分布を示す。一方、大型の一群は特にサイズにこだわらず、40g台から300g台まで偏りなく見られる。

小型の一群はほとんどが剥片を素材とし、大型の一群は礫ないし分割礫を素材としている。露頭では崖から剥落して転がる間に割れた下呂石も多く見られることを考え合わせると、当資料群においては分割礫も礫に準じて扱うことが可能であろう。10は剥片剥離が行われていない小礫である。礫を素材とする石核のいずれよりも小さく、このことが剥片生産に及ばなかった理由であるとも考えられる。

作業タイプの選択については、サイズによって偏りがあるわけでも、素材の状態(剥片か礫か分割礫か)によって偏りがあるわけでもない。(打面転移タイプは打面も作業面も固定されずに移動するため、素材の状態は不明になりがちになるが。)数値化して示すことは難しいが、剥片や板状の礫など薄い素材は交互剥離、打面固定タイプの手法がとられ、厚手の素材は打面固定、打面転位タイプの手法がとられる傾向があるようにみえる。素材の形状によって、臨機応変に作業タイプは選択されたのであろう。

では、こうした石核からは、どのような剥片が生産されているのであろうか。

剥片を素材とする小型の石核からは、やはり小型の剥片しか得ることができない。また、小型の石核には、数枚程度の剥片を生産したのみで廃棄されているものが多い(4・5・16など)という特徴が見られる。(確かに、1点の石核から何枚もの剥片を作出する意図がないのであれば、それほど大きな素材は必要ない。)

これは、前剥離面を剥片の背面に取り込むことを嫌っているように見える。おそらく、前剥離のネガ面を取り込むことで剥片が湾曲することを避けようとしたのであろう。なぜなら、湾曲した剥片は石鏃(など?)の製作に適していないからである。

また、大型の石核についても、作業面に残る剥離面を見る限りそれほど大きな剥片を生産しているようではない。しかし、何枚も剥片を生産しているものも目立ち(18・21)、この点で小型の一群とは異なっている。礫素材の石核から初めに剥離された剥片は背面に礫面を有することになるが、幅広の作業面が得られる素材では打点を左右にずらしながら、前剥離面が形成した稜を取り込

むように剥離している(18・21)。石核断面およびバルブの観察からは、得られている剥片は総じて厚手であることが読み取れる。こうした厚手の剥片は、くさび形石器や石鏃(当資料群には見られないが)、小型のスクレイパーなどに用いることができる。

以上のように、当資料群の石核は素材の状態とサイズによって大きく2つに分けられ、得られる剥片も若干異なることが想定される。

#### 4. 下呂石製剥片資料について

次に、剥片について概観してみたい。第4図は剥片の質量別分布である。グラフには入らなかったが、50gを超える剥片も4点ある(56g・56g・67g・78g)。

当資料群における剥片の主体は4g未満の小片である。(スクレイパーなどの調整剥片・チップ類はほとんど認められないが、これは採集者による選択もしくは見落としによる可能性もある。)チャート岩製剥片の全点、黒曜岩製剥片の大部分もこの範疇に収まる。このサイズの剥片から製作できる石器といえば、やはり石鏃であろう。

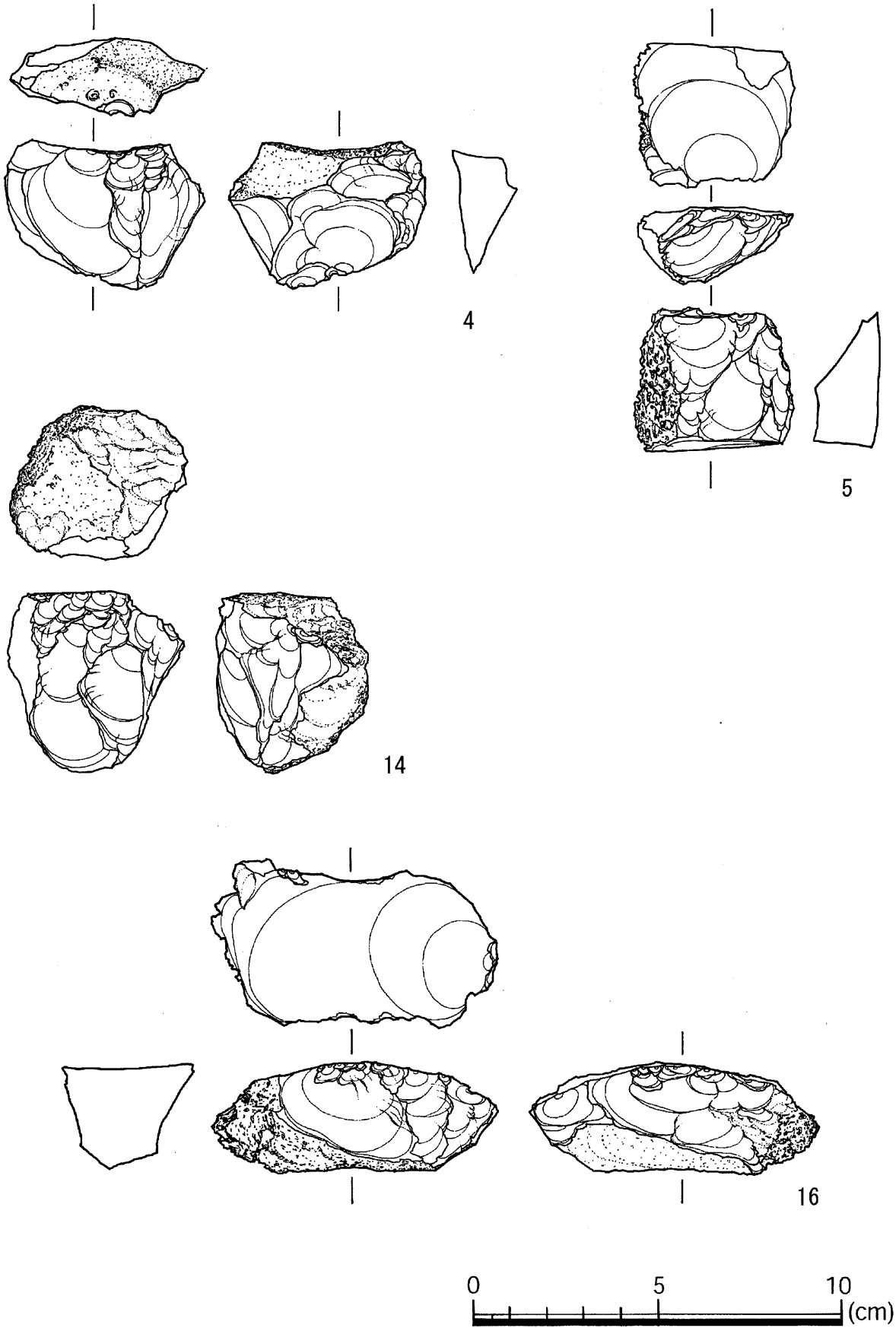
石核の項でみたように、小型の一群からは小さな剥片が生産される。当資料群の多くを占める小剥片のいくらかは、これらの石核を用いて遺跡内で生産されたものであろう。やはり、背面は1枚の平坦な剥離面からなるものが多い。

ただし、小型の石核1点あたりから、さほど多くの剥片が作出されていないとすれば、石核に比べて剥片の数があまりにも多すぎる。多くの石核が持ち出されたか、小剥片が遺跡外から持ち込まれたかどちらかであろう。

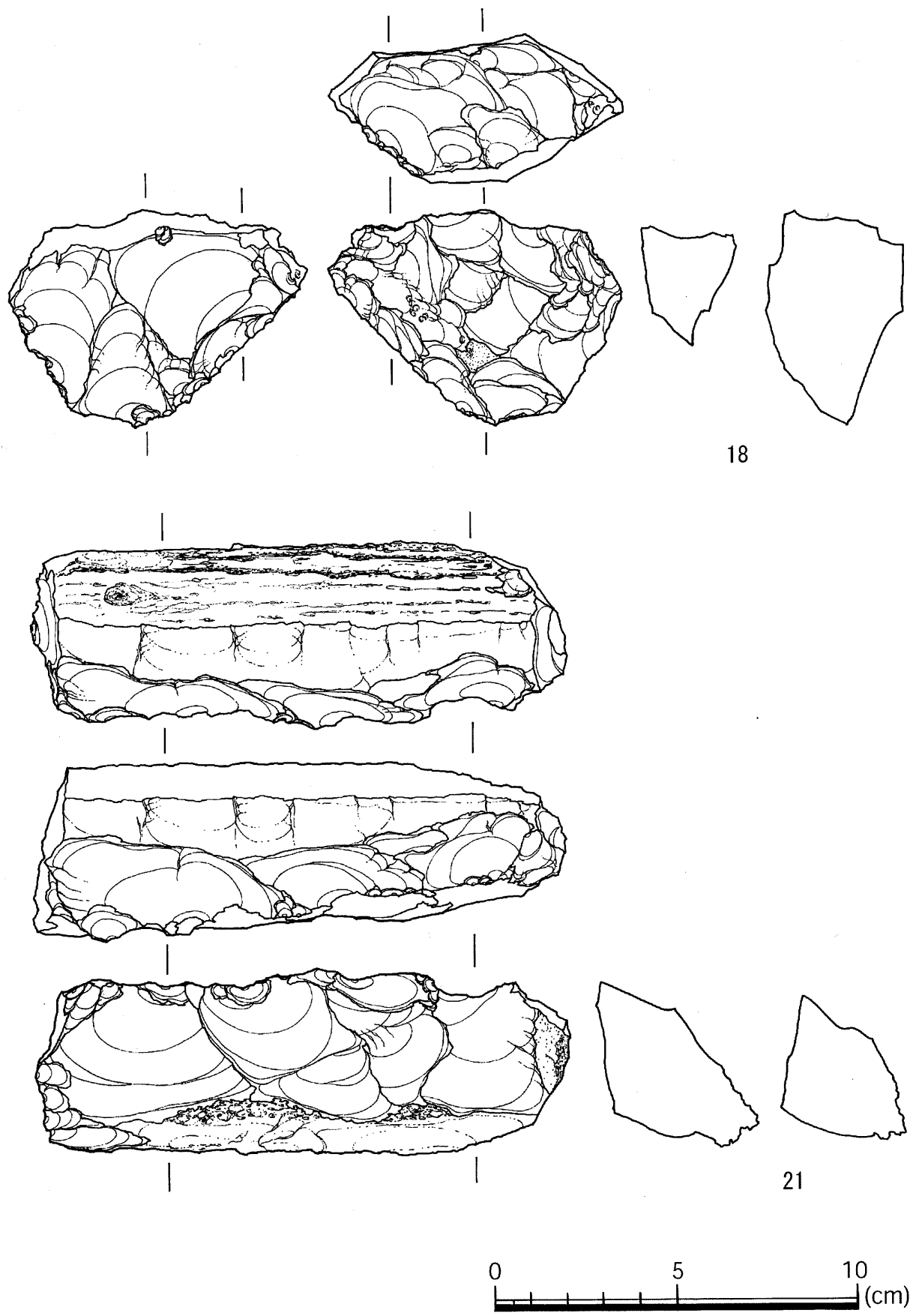
剥片は、0~2gをピークに、それより大きくなると次第に減少していく。6g~20gあたりまでは、やや厚手で背面に複数の剥離面を有する剥片も目立つ。これらには礫素材の大型の石核から得られたものも含まれるであろう。小型のスクレイパー、くさび形石器の大部分がこの範囲内の剥片を用いている。

20gを越えると、剥片の数は急減するが、それ以上の剥片については、40g台前半まで絶えることなく少数ずつ満遍なく見られる。このサイズの剥片を作出した石核は見られないことから、当遺跡内で生産されたものとは考えがたい。これらの剥片はほとんどが別の地点で生産され、持ち込まれたものと考えられる。

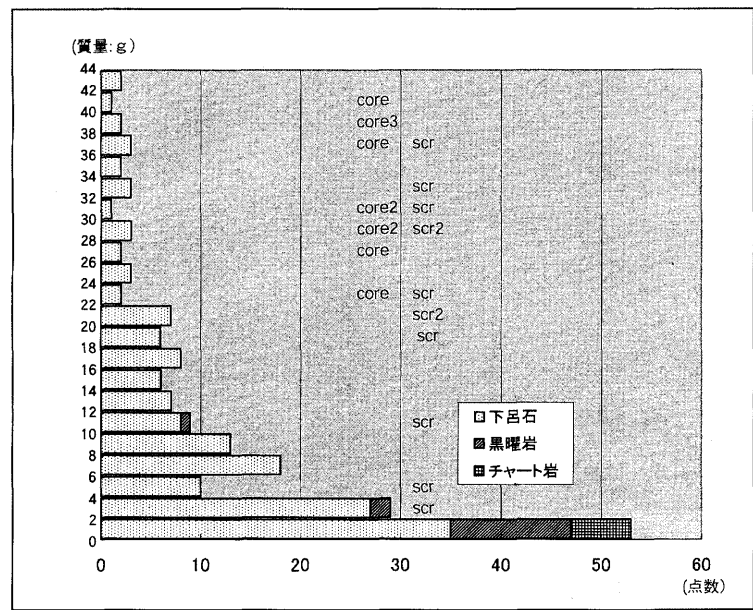
何のために持ち込まれたのか。20g~40g台前半というのは、ちょうど小型の石核や、中型大型スクレイパーの素材となるサイズである(第4図)。こうしたものの素材として持ち込まれたのであろう。



第2図 三ツ石遺跡採集石核実測図1（番号は一覧表に準じる）



第3図 三ツ石遺跡採集石核実測図2（番号は一覧表に準じる）



第4図 剥片の質量別分布

露頭や乗政川では、数kgもあるかなり大きな礫も拾うことができ、大きな剥片を作出することも容易である。大きな剥片ないし礫を遺跡に持ち込めば、それを分割、剥離していつでもお望みの大きさの素材剥片を得ることができる。

しかし、三ツ石遺跡ではそうはしなかったようである。そんなに大きくない、スクレイパーにも石核にもなる汎用性の高いサイズの剥片が選ばれて持ち込まれ、消費されている。とっておくことを念頭に置かないで、普段使いの分だけ石材を用いているのだ。これは原産地が近くにあるからこそ、不足分の供給が手軽にできたからこそ可能な戦略であろう。

#### 4. まとめ

従来の石核分類は、技術的な側面から行われることが多かった。今回の分析で「作業タイプ」と称した視点である。しかし、技術的側面に依った伝統的な分析手法だけでは意味を見いだすことができず、研究が行き詰まってきたことは、多くの報告書担当者が感じているところではないだろうか。

最近の石器研究では、技術論以外に様々なアプローチの方法が模索され、提示されている。その一つがシェーン・オペラトワールである。剥片剥離という行為をシェーン・オペラトワールの一部としてとらえるならば、その行為のためにどのような準備が行われてきたのか、またその行為にどのような目的で行われているのか（行為によってどのような産物を得ようとしているのか）、という視点が求められよう。すなわち、どのような状態で

石材が搬入されたのか、どのような剥片を求めたのか（石核廃棄は石核の有用性が失われた結果の行為である。であるとすれば、廃棄された石核のあり方から、求められた剥片について推測できるのである）、という問いをもっと純粋に追求すべきなのであろう。この論考では、こうしたシンプルな視点から遺物を分析し直してみた。

今回の分析は、対象が地表面採集資料である。地表面採集という方法が考古学のデータ収集手法として見直され、遺跡（群）を取り巻く地域の様相を解明するのに成果を上げてきている。採集者による資料の選択というノイズが省かれ、時代の特定が可能な場合などの条件がそろえば積極的に評価することもできよう。しかし、やはり他遺物との供伴関係や遺構とのからみなどが明らかな発掘資料ほどの雄弁さはない。

幸い、湯ヶ峰周辺では縄文時代草創期の大森遺跡、早期の上ヶ平遺跡、前期の峰一合遺跡など各時期の遺跡が調査されている。

今回試みたシェーン・オペラトワールの視点で、もう一度資料を洗い直すことができればと思う。

#### 参考文献

下呂町教育委員会 1990.『飛騨下呂 通史・民俗』  
岐阜県教育委員会 1990.『改訂版 岐阜県遺跡地図』  
岩田修 2000.『地形・地質環境』『上ヶ平遺跡Ⅰ』  
財団法人岐阜県文化財保護センター  
長屋幸二 2005.『濃尾平野の下呂石』『下呂石シンポジウム2005』  
高井良夫 1985.『下島遺跡』下呂町教育委員会



流状構造



滑らかな節理面



爪状クラック

第5図 礫面の状態